

# ヴィクトリア朝絵画における男性性

平林美都子

## Masculinities in Victorian Painting

Hirabayashi, Mitoko

20世紀後半にめざましく進展したフェミニズム研究は、女らしさの虚構性を暴き出してきた。フェミニズム研究を通して、男らしさも虚構であり実体がないのだと理解されるようになってきたのも当然の成り行きである。とくに1985年、Eve Sedgwickがその画期的な著作である *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* において男性間のホモソーシャルな関係を論じて以来、男らしさ／男性性が社会的・文化的構築物だという認識は、「男性学」や「ゲイ・スタディズ」によって盛んに進められてきた。こうした研究は、男らしさ、男性性本質論を疑問視するだけでなく、複数の多様な男性のアイデンティティの存在も認めることになってきた。現在では絶対的で普遍的な男性アイデンティティとは虚構でしかないこと、個々人の形成する男性性は葛藤や不安、矛盾に満ちたものだ理解されている。

ヴィクトリア朝社会でジェンダーが支配的なコードとして働いていたのは周知のことである。すでに多くのところで論じられているように、当時の女性は「家庭の天使」／「墮落した女」、「マドンナ」（聖母）／「マグダレン」（娼婦）と二分されていた。ヴィクトリア朝の文学や絵画にはこのように分類された女性像であふれている。もちろんこうした表象が現実の女性の姿でないことは明かである。そもそもこうした絵画を描く主体の大部分は男性であった。そして男性も厳格なジェンダーのコードに縛り付けられていたのはいままでもないだろう。英国が他国に先駆けて産業化社会へ転身し、帝国主義への道を登り続ける時代に、いかにいえば、世界のリーダーたる地位を任じていた時代に、男性は家庭や社会、世界のリーダーとしての男性のアイデンティティが求められたのである<sup>1</sup>。

明確な男性役割が求められる一方、男性のジェンダー・アイデンティティが形成される社会的な環境は逆行していたようである。産業革命以後、社会構造は仕事場と家庭に二分された。この二分化は実はジェンダーの空間化を意味することになった。つまり、家庭という私的空間は女性の領域とされ、仕事場という公的空間は男性のものとなったのである<sup>2</sup>。今回の私の考察の対象は知的中流階級の男性であるが、そうした男性の大半は、家庭かその近隣で働いていたというのが実状である<sup>3</sup>。しかし、ジェンダーによる領域区分が、少なくとも精神的な区分として機能していたことは確かである。男性が家事から免除され家庭からあた

かも不在同然だったことは、ある年齢までの男子が女性だけの環境の中で養育されていたことを意味する。幼少期に男性のモデルとしての父親の不在は男性性の形成に大きな影響を与え、ひいては家父長制社会の土台を揺さぶる原因にもなっていくのである<sup>4</sup>。

従来の男性性の概念を揺り動かすものとして、ホモセクシュアル／ゲイの言説の登場がある。ホモセクシュアルという言葉は、1869年、ハンガリアのKaroly Maria Benkertがライプチヒで出版したパンフレットで初めて使用したという<sup>5</sup>。それより前の1855年、アメリカの詩人Walt Whitmanが詩集*Leaves of Grass*を出版した。その中で彼は男性同士の身体的エロティックな関係を歌い上げている。ホイットマンの影響により、英国における男性性の漠然とした不安はそれ以後、ホモセクシュアルの言説へと移行していくようになるのである<sup>6</sup>。しかしAlan Sinfieldが指摘するように、こうした言説が確立する前にすでに、表現された描写の中で解釈が決定しえない「不確定な瞬間」に、ホモセクシュアリティの概念が形成されつつあったのもまた真実であろう<sup>7</sup>。それは必ずしも、ホモセクシュアリティに限ったことではない。コード化された男性性に対する矛盾や不安感、ズレという感情は、絵画や小説、詩の各所に表出しているのである。

以下本稿では、とくにヴィクトリア朝中葉から後期にかけて流布した2種類の図像—「眠りの美女」あるいは「眠る女」と、Alfred Tennysonの代表詩"The Lady of Shalott"を基に描かれた図像—を解説しながら、男性性の問題点について考察していく。なぜ当時の画家がこれらの図像に取り付かれたのか、そして女の画像に男性性の不安や葛藤がどのように投影されているのか、を考えてみたい<sup>8</sup>。

### 「眠り姫」

フランスやドイツと異なり、英国では17世紀終わり頃から、厳格なカルヴァン主義の文化的なコードによっておとぎ話が抑圧されてきた。この結果、ピューリタン文化や功利主義の啓蒙時代に、「想像性」は子どもの精神を乱すものだと排除された。子ども向けの物語や詩には、宗教的で教育的なものが求められた。その後18世紀の後半、ロマン主義の台頭する中で、想像力の価値が見直されてくるようになると、空想や魔法の物語が復活してきた。シャルル・ペローの「眠り姫」の英訳は1729年に出版されたが、ヴィクトリア朝文学や絵画でそれが本格的に流布するようになるのは、グリム童話の一部が翻訳された1823年以後である<sup>9</sup>。

ヨーロッパの伝統的な『眠り姫』は男女それぞれの成熟の物語である。王女は魔法によって深い眠りに入り性的成熟を待つ。王子はいばらの茂みをくぐり抜けて王女を救出し、一人前の男になる。このように、主体的な行動力を学んだ男性と受動的な忍耐力を学んだ女性が、最後に結ばれるのである。『眠り姫』のモチーフがヴィクトリア朝文学や絵画の中で繰り返し用いられたのは、それが男性芸術家の美学を如実に反映しているからである。指導者としての男性性を強く求めた当時の社会において、男性としてのアイデンティティを確立するため

には、他者である女性は受け身で無私の存在でなければならなかった。『眠り姫』は従順な女性性を象徴する姿である。美しい女性が凍結した時間の中で若さを保ったまま、男性による救出を眠りながら待つ—『眠り姫』の物語は、受動的で無垢な女性が男性に自分の人生を委ねるといふヴィクトリア朝の女性のシナリオであった。そしてそれはとりもなおさず、当時の結婚イデオロギーを支えていたのである。

### 「救出」のテーマ

『眠り姫』において、王子の男性性を証するものは王女の救出行為である。王子の前にも多くの若者がこの試練を試みながら失敗していた。「女性の救出」はヴィクトリア朝の文学と絵画において非常に好まれたテーマだった(図1)。Adrienne Auslander Munichは*Andromeda's Chains* (1989)において、ペルセウスとアンドロメダの神話やイギリスの守護神セント・ジョージの英雄物語などにみられる「救出」のテーマを分析している<sup>10</sup>。いずれもドラゴンの生け贄に差し出された美女を救う物語である。ミューニックは、Dante Gabriel Rossetti、William MorrisやEdward Burne-Jonesらが、彼らの詩や絵画の中で「救出」のテーマの隠された真実を描き出していると論じている。つまりこのテーマの処女の救出が、逆説的に処女性を奪うことを意味しているということである。神話上、



図1 John Everett Millais, *The Knight Errant*



図2 Edward Burne-Jones, *St. George and Dragon*

パーン・ジョーンズの *St. George and Dragon* では、聖ジョージの槍がドラゴンの口を貫き、ドラゴンの胴を貫通している矢は、聖ジョージの両足の間に位置している。この絵のドラゴン退治には、美女の処女喪失というエロティックな意味も暗示されているのである(図2)。フランス人画家Ingresの*Ruggiero delivrant Angelica* (1830)は、イタリアの詩人Ariostoの『狂えるオルランド』をヒントに描かれたが、ペルセウスや聖ジョージの「救出」と類似した



図3 Jean Dominique Ingres  
*Ruggiero delivrant Angelica*

構図を持っている(図3)。この絵でも、斜めに横切る槍はファリックなシンボルだといえよう。恐怖のあまり身をよじるアンジェリカと長い首をねじ曲げているドラゴンは似たようなポーズを取り、奇妙にも、美女とドラゴンは重なり合っている。ドラゴンの身体を貫いた槍がアンジェリカの処女喪失を予兆しているのも、バーン・ジョーンズの絵と類似している。バーン・ジョーンズの *St. George* の絵でも、美女の救出が曖昧になっている(図4)。聖ジョージが持つ盾の紋章には、裸体の美女と蛇が描かれている。捕らわれの美女を救出するはずが、あたかも彼女をドラゴン/蛇といっしょに盾の中に閉じこめてしまったかのようなのである。女と蛇との連想は女の誘惑に対する恐怖を

象徴している。いいかえれば、両者を閉じこめることにより男は女のセクシュアリティから安全なのである。「救出」の瞬間にみられるこうした逆転は、女性性や男性性が矛盾を孕んで



図4 Edward Burne-Jones, *Saint George*

いることを物語っている (Munich 86-131)。

『眠り姫』にも矛盾は明かである。『眠り姫』は男女それぞれの成熟の物語であり、王子のキスは女性が性的に無垢な状態から成熟へと目覚めさせることを意味した。しかし果たして女性は本当に目覚めるのだろうか。19世紀の結婚制度が文字通りにも比喩的にも、女性を「家」に閉じこめていたことを考えると、『眠り姫』はたとえ眠りから解放されても結婚という制度に再び閉じこめられてしまうのである。『白雪姫』でも同様のプロットが展開される。白雪姫は仮死状態、つまり「ガラスの棺」に入った状態で王子に見初められて、いわば「モノ」として「所有」される。そして生き返った後、今度は結婚制度に閉じこめられるのである。いずれの童話でも、女性が1人の人間として目覚めることはないのだ。

『眠り姫』の「救出」が、女性にとって結婚制度への幽閉というネガティブな意味を持っているとすれば、それは男性にとってもネガティブな意味を持っていた。ヴィクトリア朝のジェンダー・コードが厳格であることは前にも述べたとおりである。女性を聖女として理想化しようとする背後には、性的な存在としての女性恐怖が存在している。妻や母が性的な存在ではありえない。にもかかわらず、「家庭の天使」「聖女」と名づけることによって、一方で妻や母の恐怖を消去し、他方でその恐怖を性的な存在である「墮落した女」「娼婦」に集結させようとしたのである。ところが「眠り姫」の「救出」は、男らしさを証する手段であると同時に、女性を性に目覚めさせるという、男性にとって恐怖を復活させることだった。つまり女性の「救出」行為は、男性性にとってダブルバインドだったのである。

### 目覚めない眠り姫

バーン・ジョーンズは『眠り姫』が内包するダブルバインドに取りつかれていた。彼は1860年代から95年まで30年間にわたって『眠り姫』を題材にした *Briar Rose* を描いた。1863年、彼は9枚のタイルにペローの『眠り姫』を描いた。その後1870年から『いばら姫』の三種類のシリーズものを描いている。このシリーズものには「王子がいばらの森に入る」「会議の部屋」「眠っている王女」の3枚と、のちに、「薔薇の部屋」の絵が加えられた。奇妙なことに、いずれの『いばら姫』のシリーズでも、バーン・ジョーンズは王子のキスシーン、つまり王女の目覚めのシーンを描いていないのである。彼はこの理由を、「私は王女を眠ったままの状態で留めておきたいのです。それ以上は何も説明せず、その後のことは観る人の創意や想像にまかせておきたいのです」(Lutchmansingh 126)と説明している。つまり彼が描きかけたのは永遠に目覚めない「眠り姫」だったのである。Lutchmansingh はバーン・ジョーンズが救出を達成する場面を避けたのは、王女を目覚めさせたくなかったからだろうと指摘し、それを王子の描写から説明している。最初のいばら姫のシリーズでは、王子が森に入るとき姿勢に彼の決断が見て取れる。王子の目は前方を見据え、足と剣は彼の確固たる決断と調和している(図5)。それと対照的に、第3のシリーズの王子は、森に入って姫を救出する意志が萎えているようである(図6)。両足は平行で前に踏み出すようにみえず、視線も



図5 Edward Burne-Jones, *The Briar Wood (The Briar Rose)* (1871-3)



図6 Edward Burne-Jones, *The Briar Wood (The Briar Rose)* (1874-84)

焦点がはっきりしていない。剣は身体の側面に下向きで持ち、盾といえば、救出の試練に失敗した騎士たちの死体を視界から遮るように目の前に持ち上げている。おそらく、第3のシリーズで描かれた王子に、王女を目覚めさせたくないというバーン・ジョーンズの願望が込められているのだろう。

### 女性恐怖と子どもへの偏愛

『眠り姫』にみられる永遠の処女に対する男性の願望とは、女性恐怖の裏返しであろう。美術評論家、社会理論家、地質学者にして画家でもある John Ruskin の結婚生活は、この顕著な例である。彼は妻 Euphemia (エフィ) と結婚以来一度も性交渉がなかったことが理由で、6年後の1854年、結婚が無効とされた。エフィはその1年後、画家の John Everett Millais と結婚した。裕福な実業家の家に生まれたラスキンは、厳格な家父長制気質の父とピューリタンの母によって、厳しくそして過保護に育てられた。彼の生い立ちが男性性の確立に葛藤や問題を生じさせたことは、容易に想像できるだろう。

成人した女性への恐怖心は、子どもへのエロティックな愛情に変換していく。ラスキンは39才のとき(1858年)9才の Rose に出会い、年の差を越えて彼女に恋した。その後1975年に

彼女が死ぬまで、二人の不思議な絆は続いた。彼はまた、27才年若い児童書挿し絵画家の Kate Greenaway と交友を続けた。64才のとき（1883）ラスキンはグリナウエイに懇願の手紙を書いている。それは彼女の描く少女を「立たせて、帽子、靴、手袋を取り除き、服（フロック）を着せない姿の絵を描いてくれないか」というものだった<sup>11</sup>。このエピソードは彼のロリータ願望をよく物語っているだろう（図7）。バーン・ジョーンズが最初に妻 Georgiana に会ったのは、彼が19才彼女が10才のときである。二人は4年後に婚約し、さらに4年後に結婚した。バーン・ジョーンズも幾人かの少女に惹かれていた。ほほえましい書簡集 *Letters to Katie* の相手、Katie Lewis と出会ったのは、彼が50代、彼女が6才のときである。



図7 Kate Greenaway, *The Garden Seat*

Nina Auerbach と U.C. Knoepflmacher はヴィクトリア朝児童文学を代表する作家として、Lewis Carroll (Charles Dodgson), George MacDonald, James Barrie の三人の名をあげている。このうちキャロルの少女偏愛趣味とバリーの少年趣味は有名である。キャロルは次々に新しい少女友達を求めて、次々に新しい手紙を彼女たちに書いた。20代から晩年に至るまで、少女たちに書いた手紙の数は160通にもものぼっている。キャロルはまた多くの少女の写真も撮影している（図8, 9, 10）。友人の娘を「眠る女」というテーマでポーズをとらせたり、「裸の子どもは完璧に純粋で美しい」と語って、子どものヌード写真も好んで撮っている<sup>12</sup>。*Peter Pan* の作者であるジェイムズ・バリーは身長が150センチほどで華奢な体つきだったこと、声がかわめて高かったことなども、彼が女性恐怖症になる一因だったと思われる。30代半ばに結婚したものの、妻と夫婦生活はなかったということである。彼が幼い少年たちとの交友がはじまったのもこのころである。散歩の途中で見かけた4才の少年ジョージに関心



図 8

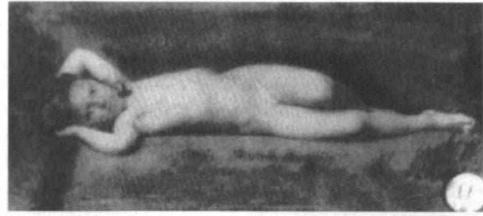


図 9



図10



図11 左より George(8), Jack(7) and Peter(4)

を持ち、その子に会うために、数ヶ月間、毎日公園に出かけていった。このジョージと兄弟が、後にピーターパンのモデルとなったのである(図11)<sup>13</sup>。

19世紀中葉から世紀末にかけて『眠り姫』のモチーフは絵画や文学に繰り返されていく(図12, 13, 14, 15, 16, 17)。

画家たちがいわば「目覚めた」女性に

恐怖心を抱きつつ、なおも「眠る女」に執着したと言うことは、男性のアンビヴァレントな感情を反映しているといえるだろう。すなわち、少女を描いたり目覚める前の女性を描くということは、成熟の可能性を持つ女性、あるいは性的(セクシュアル)な女性に惹かれていくことの裏返しだったということである。自らの男性性が脅かされない限りにおいて、こうした女性に惹かれていたのである。D.G. ロセッティの詩 "Jenny" (1848) がその一例である。この詩の語り手は上流階級の学級の徒である。彼ははじめて一晩、街の女ジェニーと一緒に音楽と踊りに浮かれ騒いだ。疲れたジェニーは自室に戻り、語り手の膝を枕に眠り込んでしまう。眠るジェニーに誘発されて夢想したのが、「ジェニー」という詩である。ロセッティは妻エリザベス・シダルが死んだとき(1862)、彼女の髪と頬の間に自分の詩を挟み、棺に収めて埋葬した。7年後、彼は妻の棺を掘り起こして詩を取り戻した。詩の紙は破れて大部分が読めなかったが、彼は記憶と手元にあった下書きで、「完全な状態に取り戻すことができるだろう」と言っている<sup>14</sup>。しかし「ジェニー」という詩の「救出」は、女が目覚めではなくて、ジェニーを「眠る女」として取り戻すことだった。眠ることによって娼婦のジェニーも、欲望を持たない従順な女になる。女を眺めている限りにおいて、男は、支配的な男性性を維持することができるのである。



図12 John Anster Fitzgerald, *The Stuff That Dreams are Made of*



図13 Albert Moore, *Dreamers*



図16 Albert Moore, *Midsummer*



図14 Edward Burne-Jones,  
*The Garden Court (The Briar Rose)*



図17 Frederic Leighton,  
*Flaming June*



図15 Edward Burne-Jones,  
*The Princess and her Maidens Asleep*

テニスの詩「シャロットの姫」(1832/1842)はアンビヴァレントな男性の感情を表出させる題材となった。詩の内容は次のようである。――アーサー王の住むキャメロットをよるかにみるシャロットの川中島の塔に、姫が1人、呪いのために日夜機を織っていた。彼女の呪いとは、目の前の鏡を通して見える世間の様子を織り上げることである。ある日、彼女は結ばれたばかりの男女の姿を見て「影の世界に飽きてきた」とつぶやく。そんな折り、日の光を凜然と浴びて輝く鎧姿の騎士ランスロットが通りかかった。鏡の中のその姿に魅せられたシャロットの姫は、禁にそむいて窓の外を見る。たちまち呪いが彼女に降りかかり、機織りの糸は飛び散り、鏡は砕ける。最期が近いことを知った彼女は、小舟に乗り、川を下っていく。シャロットの亡骸はキャメロットの騎士たちのもとへと行き着いた――。

前にも述べたように、英国の産業化による社会構造の変化の一つに、ジェンダーの空間化があった。当時の社会的文化的コンテクストを考えると、シャロットの姫が塔に「幽閉」され、鏡を通して世間を見ていた理由も明かである。つまり、家の中が女性の領域だったからである。外の世間を体験していないという意味で、彼女の状況は「眠っている」といえるのかもしれない。「影の世界に飽きて」外の世界に憧れ、そこから脱出することは、女性にとって真の意味の「目覚め」を意味する。これがもしも世紀末ならば、シャロットの姫は「ニュー・



図18 Arthur Hughes, *The Lady of Shalott*



図19 Waterhouse, *The Lady of Shalott*

ウーマン」になりえたかもしれなかった。しかしテニスは、シャロットの姫に文化的なジェンダー・コードを越えることを認めなかった。彼女はジェンダーの境界を越えた違反行為のために死ぬことになるのである。

以後、19世紀全般にわたって「シャロットの姫」は多くの画家の想像力を掻き立ててきた<sup>15</sup>。ここには、一方で、シャロットの姫の謎めいた神秘性と女の欲望の表出が描かれ、他方、その欲望には罰が下される。いいかえれば、欲望を持つ女性に惹かれつつも彼らの男性性は安泰であるという、矛盾した男性性を描く格好の題材だったわけである。1861年から1913年までの半世紀に王立美術館に展覧された「シャロットの姫」は19点に上ったという。「シャロットの姫」と姉妹版の "Lancelot and Elaine" (*Idylls of the King*) を基にした絵は26点が展覧された。なかでも多くの画家が描いたのは、シャロットの姫が小舟に身を横たえて死にゆくシーンである(図18, 19)。この

シーンは *Hamlet* におけるオフィーリアの溺死のイメージと重なり合い、後者もまた好んで描かれた (図20)。J.E. ミレーの *Ophelia* (図21) は、後にロセッティの妻となる Elizabeth Siddal がモデルとなった。1852年の1月、ランプの火で風呂の水を暖めながら、彼女は5時間、水の中に横たわった。途中ランプの油がなくなって火が消えたが、ミレーは気がつかぬまま、そしてシダルも凍り付いた水の中で黙ったままだった。彼女は風邪をこじらせ肺炎になり、何ヶ月も快復しなかった。

「溺死した女」は「眠る女」の図像と並んで、ヴィクトリア朝の画家によって繰り返し描かれた (図22)。Barbara Gates によれば、ヴィクトリア時代女性の自殺が男性より多かったわけではなかった。しかし、女性が一方で神話化され、他方で怪物化された時代故に、自殺は「女の病」に結びつけられていたのである。かつて魔女裁判では、魔女かどうかの判定は溺れるか否かで決めていた経緯があった。ヴィクトリア朝文学では、溺死が社会秩序の破壊者である「墮落した女」や「娼婦」の行き着く運命だった。「溺れ死ぬ」ことは魔女の汚名から逃れることだった。19世紀の娼婦も「溺死」することによって、哀れみをうけ、家父長制社会の秩序も回復するのである。女の溺死の図像は、ヴィクトリア朝男性性の矛盾した感情を表現したものである。*David Copperfield* の Martha Endel (図23) や *Oliver Twist* の Nancy などはヴィクトリア文学の溺死する女の例である (Gates 125-150)。



図20 Arthur Hughes, *Ophelia*



図21 John Everett Millais, *Ophelia*



図22 George Frederic Watts, *Found Drowned*



図23 Hablot Browne, *The River*  
(*David Copperfield* より)



図24 Waterhouse, *The Lady of Shalott*



図25 Holman Hunt, *The Lady of Shalott* (1950)

「シャロットの姫」を基に画家たちが好んで描いたもう一つのシーンは、彼女が窓から直接にランスロットを見たため、機織りの糸が飛び散り鏡が割れるクライマックスのところである(図24)。なかでも Holman Hunt は、55年間にもわたって『シャロットの姫』の絵に取り組み、とくに執着したのがこのシーンだった。1850年の絵はペンとインクでかなりシンプルに描かれている(図25)。1857年には、テニスン詩集モクソン版の挿し絵として「シャロットの姫」の版画を作った(図26)。この版画が、彼が最後に20年にわたって描く絵(図27)の基になっている。ハントの2枚の絵ではいずれも、シャロットの姫の髪が後部に逆立ち、まるで魔性の女のように描かれ、そして機の丸い枠と飛び散る糸に二重に取り囲まれている。いかえれば、彼が長年にわたって描いた「シャロットの姫」は、女の欲望の表出とその封じ込めがテーマになっているのである。ここには、降りかかる呪いに対して彼女の反応の凄まじさが鮮やかに描かれている。ハントは受動的な女ではなく、「自ら混沌状態を作り出す」(Gay Daly 244)ような能動的な女に惹かれていたが、女の能動性を彼自身が制御できるという条件つきだったようだ。ハントのシャロットの姫は、結局、機織りの糸と機に捕らわれて、そこから逃れることはできないのである。

これと対照的な絵が、エリザベス・シダルの「シャロットの姫」(1853)(図28)である。彼女は機の前に落ち着いて座り、顔だけが窓の外を向いている。「窓の外を見る女」の図像は、ジェンダーが空間化された19世紀には女性の社会生活の願望という特別の意味を持っていた<sup>16</sup>。ハントの絵と違い、鏡がひび割れて織り糸が飛び散っても、シダルの描く姫はそれに動じる様子もない。シダルのシャロットの姫には女性の願望が静かに表出している。



図26 *The Lady of Shalott* (1857)



図27 *The Lady of Shalott* (1886-1905)



図28 Elizabeth Siddal, *The Lady of Shalott*

### 視線 / 絵に捕縛される

女の死は、一方で女自身の意志の表明とも考えられるかもしれない。とりわけジェンダーの制約を受けた19世紀の女性にとって、死は祝福でもあったからだ。Florence Nightingaleの"Cassandra"でも、死は女にとっての勝利として次のように讃美されている—— 'you would put on your wedding-clothes instead of mourning for me!... Free-free-oh! divine freedom, art thou come at last? Welcome, beautiful death!' ('嘆く変わりに私のために婚礼用の晴れ着を着て下さい... 自由—ああ自由! 神聖なる自由よ。とうとうやってきてくれたのですね。ようこそ美しい死よ) —— ("Cassandra" 54-55)。また Christina Rossetti の詩 "At

Home" や "After Death" の女の語り手は、死んではじめて主体的に語る声を持つことができるのである<sup>17</sup>。

他方、男性の描く女性の死は、女性の究極的な犠牲として扱われる。テニスの「シャロットの姫」が男性性の問題点や矛盾を露呈しているのは確かである。詩の最終部で、キャメロットに流れ着いたシャロットの姫の亡骸を見て、アーサー王の騎士たちは「恐れて十字を切った」と描写されている。彼らの恐怖とは、シャロットの姫が（禁を犯した結果）塔から脱出したことに対するものである。19世紀の社会的コンテクストにいかえれば、これは、彼女が私的な領域から脱出してジェンダー・コードを侵そうとしたことに対する恐怖である。ところが、この詩は最終的に、シャロットの姫の死とランスロットの「彼女は美しい顔をしている」という言葉で終わっている。つまり、彼女は男性の不安を掻き立てながらも、結局は男性の視線の中に囲い込まれてしまうのである。たとえ彼女の行為が抵抗という意味を持つとしても、彼女は主体的に語ることもしないまま、死に身を任せるしかないのである<sup>18</sup>。

テニスの「シャロットの姫」に取りつかれたヴィクトリア朝の男性画家は、男性性の不安や矛盾をそこに感じ取ったのだろう。シャロットの姫の幽閉された人生とそこからの脱出。彼女には、男性の欲望をそその女の欲望のエネルギーを秘めていた。しかし男性性を保持するためにはその欲望を封じ込めねばならない。画家たちは、溺死する女や織り糸に捕らわれた女を描くことによって、画像の中でも女の欲望を封じ込めようとしたのである。Robert Browningの "My Last Duchess"でも死んだ女性は絵に凍結される。この詩は、誰にでも愛想を振りまく妻が語り手の夫に（おそらく）殺され、肖像画に封じ込められて、所有される話である。女の死は、女性への恐怖心が末梢されたという意味だけでなく、死んだ女の画像を男性の審美的対象として所有するという意味において、ヴィクトリア朝の男性性には重要



図29 Dante Gabriel Rossetti, *The Lady of Shalott*

だった。D.G. ロセッティがテニスの「シャロットの姫」の挿し絵として選んだのは、詩の最後の部分、ランスロットが彼女の亡骸を眺めるシーンである（図29）。ロセッティは1846年から Dante の *La Vita Nuova* (『新生』) の翻訳をはじめており、死んだ恋人ベアトリーチェへの理想的愛に魅了されていた。彼にとって、愛は死を連想させるものだった。前に述べたように、1862年、妻シダルは常用していたアヘンの飲み過ぎで自殺する。シダルが意図していたかどうかは定かではないが、彼女は自らの命を絶つことによって、ロセッティが彼女に望んだ役割、すなわち死んだ恋人役を演じてみせた。そして、このときはじ

めてロセッティは死んだ恋人を自分のものにすることができたのである。

アメリカの作家・詩人の Edgar Alan Poe (1809-1849) は "The Philosophy of Composition" の中で「美女の死は疑いもなく、この世で最も詩的な題材である」(201) と語っている。27才のときに13才の従妹と結婚したというポーの実人生を重ね合わせると、彼の論じる美学は、ヴィクトリア朝の男性が感じていた不安や葛藤を表明しているといえるだろう。

#### 注

1. 19世紀英国における男性アイデンティティについては、Herbert Sussman, Christopher Lane, James Eli Adams, Donald E. Hall, Joseph A. Kestner, Richard Dellamora などが詳しい。
2. Lynda Nead はジェンダーの空間化によって、家庭とカントリーが女性化し神聖視されたことを論じている。Nead 32-44.
3. John Tosh 49.
4. Sussman 46.
5. Richard Dyer 1.
6. Whitman の詩が英国に与えた影響については、Dellamora 9, 17, 86-93 を参照のこと。
7. Alan Sinfield 8.
8. 本稿は一部、拙稿 "Masculinities in Nineteenth-Century Britain" と重複している。
9. Jack Zipes, Introduction.
10. たとえば、アンドロメダが生け贄として捧げられて、龍の餌食になるところをベルセウスに救われる；リビアでドラゴンの餌食にされた王女をセント・ジョージが助ける、といった似通ったモチーフがある。
11. Jackie Wullschlager 24.
12. キャロルの「少女偏愛」については、Wullschlager 2章、キャロル【少女への手紙】、【写真家ルイス・キャロル】などを参照のこと。
13. バリーの「少年偏愛」については、Wullschlager 4章参照のこと。
14. 1869年10月に Ford Madox Brown にあてた手紙。Lionel Lambourne 192.
15. 当時から現在 (1985年) に至るまで Tennyson の "The Lady of Shalott" に影響を受けた絵画については *Ladies of Shalott: A Victorian Masterpiece and Its Contexts* が非常に有用な資料である。
16. Lorenz Eitner 参照のこと。
17. 平林【待たされた眠り姫】6章参照のこと。
18. シャロットの姫が男性の視線に取り込まれることについては、平林【改訂女と隠遁】1章を参照のこと。

#### 使用文献

- Adams, James Eli. *Dandies and Desert Saints: Styles of Victorian Manhood*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1995.
- Auerbach, Nina, and U. C. Knoepfelmacher, eds. *Forbidden Journeys: Fairy Tales and Fantasies by Victorian Women Writers*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1992.
- Daly, Gay. *Pre-Raphaelites in Love*. London: William Collins Sons, 1989.
- Dellamora, Richard. *Masculine Desire: The Sexual Politics of Victorian Aestheticism*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1990.
- Dyer, Richard. *The Culture of Queers*. London: Routledge, 2002.
- Eitner, Lorenz. "The Open Window and the Storm-tossed Boat: An Essay in the Iconography of Romanticism," *The Art Bulletin* 37 (1955): 281-90.

- キャロル, ルイス『少女への手紙』高橋康也/迪訳, 新書館, 1978.
- 舟崎克彦, 笠井勝子『不思議の国の“アリス”－ルイス・キャロルとふたりのアリス』求龍堂, 1991.
- Gates, Barbara T. *Victorian Suicide: Mad Crimes and Sad Histories*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1988.
- ガーンズハイム, ヘルムット『写真家ルイス・キャロル』人見憲司/金澤淳子訳, 青弓社, 1998.
- Hall, Donald E. *Muscular Christianity: Embodying the Victorian Age*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.
- 平林美都子『待たされた眠り姫—19世紀の女の表象』京都修学社, 1996年  
———『改訂女と隠通—テニスンの19世紀』山口書店, 1999年。  
——— "Masculinities in Nineteenth-Century Britain." 『愛知淑徳大学論集—文化創造学部篇』第2号 (2002).
- Kestner, Joseph A. *Masculinities in Victorian Painting*. Hants: Scolar Press, 1995.
- Ladies of Shalott: A Victorian Masterpiece and Its Contexts*. An Exhibition by the Department of Art, Brown University, 1985.
- Lambourne, Lionel. *The Aesthetic Movement*. London: Phaidon, 1996.
- Lane, Christopher. *The Burdens of Intimacy: Psychoanalysis and Victorian Masculinity*. Chicago: The University of Chicago Press, 1999.
- Lutchmansingh, Larry D. "Fantasy and arrested desire in Edward Burne-Jones's Briar-rose series." *Pre-Raphaelites reviewed*. Ed. Marcia Pointon. Manchester and New York: Manchester University Press, 1989.
- Munich, Adrienne Auslander. *Andromeda's Chains: Gender and Interpretation in Victorian Literature and Art*. New York: Columbia University Press, 1989.
- Nead, Lynda. *Myths of Sexuality: Representations of Women in Victorian Britain*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.
- Poe, Edgar Allan. *The Complete Works of Edgar Allan Poe. Vol. XIV. Essays Miscellanies*. Ed. James A. Harrison. New York: AMS Press, 1965. 193-208.
- Stark, Myra, ed. *Florence Nightingale's "Cassandra."* New York: Feminist Press, 1979.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia University Press, 1985.
- Sinfield, Alan. *The Wilde Century: Effeminacy, Oscar Wilde and the Queer Moment*. New York: Cassell, 1994.
- Sussman, Herbert. *Victorian Masculinities: Manhood and Masculine Poetics in Early Victorian Literature and Art*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- Tosh, John. "Domesticity and Manliness in the Victorian Middle Class: The Family of Edward White Benson." *Manful Assertions: Masculinities in Britain since 1800*. Eds. Michael Roper and John Tosh. London: Routledge, 1991. 44-73.
- Wulshalager, Jackie. *Inventing Wonderland: The Lives and Fantasies of Lewis Carroll, Edward Lear, J. M. Barrie, Kenneth Grahame and A. A. Milne*. New York: The Free Press, 1995.
- Zipes, Jack, ed. *Victorian Fairy Tales: The Revolt of the Fairies and Elves*. New York and London: Routledge, 1987.